きびのさと
NO.87
月刊
昭和四十年九月一日 発行 （非売品）
岡山県都窪郡吉備町東町一三五 宇垣方 呼電四三七番
吉備観光協会
第七輯 人物編 第十九号

○ 松樹院瑠人 （その二）

松樹院が大石家に入嫁して十六年目の延宝元年九月六日に夫良昭は三十五歳にして此世を去ったので、松樹院は髪をおろして松樹院尼と改め養父良欽に養われた。良雄の外に孝貞と良房のふたりの弟があった。良昭がなくなって孝貞は男山八幡宮の大西坊の僧となり、末子の良房は早世したので十五歳になった良雄を連れて時々備前に戻り、里方のもとで養育していた。延宝五年正月朔日に不幸にして養父も亦死去したので十九歳になった良雄がその家督を継いで家老職の重籍についたのである。

良雄が主君に忠誠を盡したことは赤穂に謫居の身になっていた儒学者山鹿素行の教化による處も大であったろうが、見逃すことの出来ないのはその蔭に賢母と傳へられる松樹院の幼年時代の薫育にしみらしむる處があったからである。

△ 京都聖光寺境内に良雄の母君於熊の墳墓がある。

表面 松樹院厳鶴山栄亀大姉 元禄四辛未年三月十四日 （五十一歳）

裏面 施主 浅野内匠頭家臣 大石内蔵助良雄 八幡大西坊 孝貞法印

とある。即ち仇討より十二年前にして、良雄が三十三歳の時である。

鶴林山静光寺

当山は天城の上ノ町にある一向宗にして本山は京都東本願寺である。本尊は阿弥陀如来を安置している。創叡は大石権内良昭の内室くまの母君である池田出羽由成の側室、明厳院殿静光禪尼が慶安三年八月八日（俗名、池沢年令不詳）に死去したので、その冥福を祈らんがためにここに一寺を建立し、戒名に因んで静光寺と名命したのである。即ち明厳院尼は大石内蔵助良雄の外祖母に当る。山門はもと池田氏の邸宅の本門であったものを昭和十年の頃に檀家の協力によってここに移したのである。亀紋を有し昔の武家の威勢を示しているが、戸扉の上部の横板をはがして飾窓にしているのは、即内に小学校が設けられた際に改造したものである。山門を入った正面が本堂で、左手に紅梅の老樹が幡居し、背後に山を霞い竹籔に包まれた所に清楚な庭園がある。その庭園の奥に明厳院尼のとこしえに眠る墳墓がある。墓は方一間、盛り土にして墓碑はなく、ただ無名の小さな自然石が一つその中央に置かれている。周囲に厚さ三寸、高さ二尺の平石をたてまわし、土砂の崩れを防いでいる。当寺にほ天正十二年四月九日池田信輝その子之助と共に長久手の戦に討死したその家臣加賀野源介の檀那寺でもある。この子孫は天城池田氏に仕えて禄高三百石を食んだ加賀八郎兵衛（慶安の頃）にしてその家系は明治以后もこの地へ住していたが、いまは大阪に移ったという。当寺の過去帳に明厳院尼の里方の戒名が載っている。これをみると母の妙正禪尼、また姉の妙学とあり戒名に院号がなく簡単に書かれている所から推察すると、その家筋は武家でなく当時においては身分の卑しいとされていた階層の町人の出の女ではなかったかと考えられる。俗名も文献に明示してなくもとより明厳院尼の両親がどのような人物であったか知る由もないが、その娘が腰元にのぼり権威者の寵愛を受けた女性としては、人なみ勝れた美貌の持主であり、また才智にも長じていたであろうことが想像せられるのである。

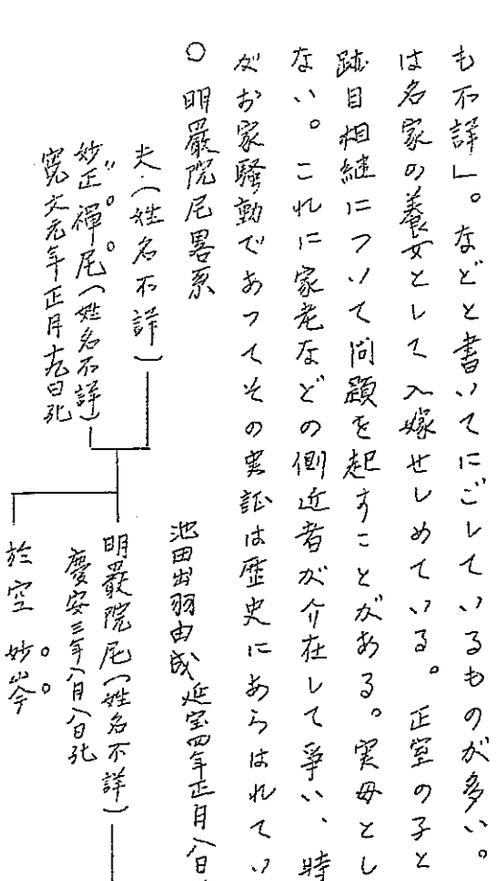
江戸時代における諸大名は祖先の武勲によってその家系は尊重され世襲制であった。この制は大名のもとにあった重臣などの間でも行われていた。そこで世継ぎのないのは



第86号つづき

左遷されたり断絶されたりした。従って諸大名は正室のほかに側女（そばめ）（侍女とか腰元ともいう）を数人おいていた。実子さえ出来れば如何なる卑しい身分の出の女性であってもそれはよかった。そこで「女は借り腹」といわれていた。女性は奴隷的立場にあったのである。しかし家系を重んずるあまり系譜上には妾腹に生れた子は「母は生所、姓とも不詳」。などと書いてにごしているものが多い。たまに正室が早死して后室に容れた時は名家の養女として入嫁せしめている。正室の子と妾腹の子は異腹の兄弟であるが、往々跡目相続について問題を起すことがある。実母として我子の出世に期待をかけないものはない。これに家老などの側近者が介在して争い、時に流血の惨をみもすことがある。これがお家騒動であってその実証は歴史にあらはれている處である。

○ 明嚴院尼墓系



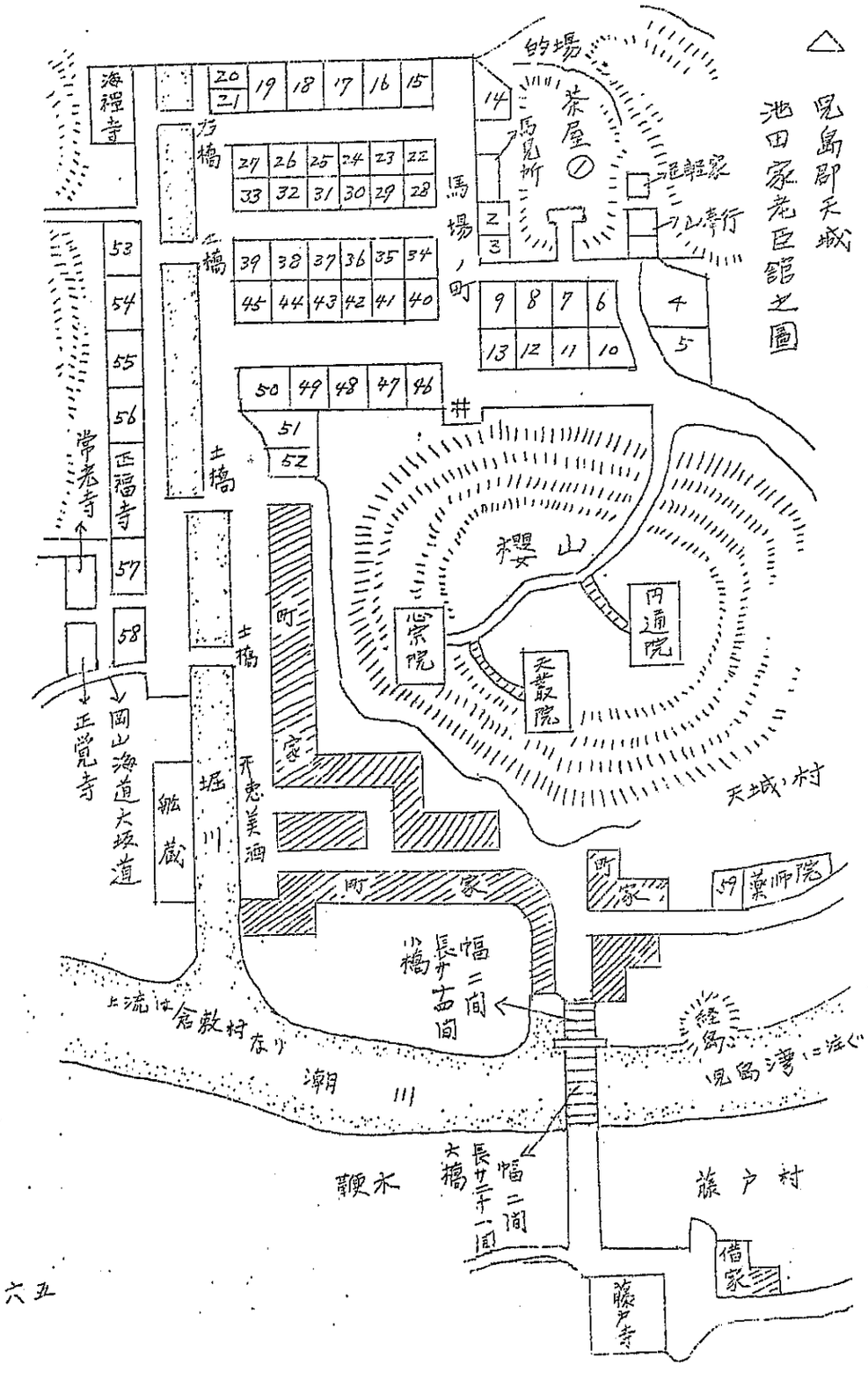

○ 西江山海禪寺

當山は天城の川向にある臨済宗にして、京都の花園妙心寺の末で、本尊は釈迦如來を安置している。創始は慶安元年、天城領主池田出羽由成が、父由之の菩提のために、岡山市の国清寺の大華和尚の法弟大痴和尚をして開基せしめ、代々菩提寺として、寺領百三十石を寄進し明治に至るまで庇護した古文書がある。由成の先祖は岡山藩主池田氏と同じく池田信輝から出た家筋にして、池田氏の嫡流に当るのである。もと美濃国池田郡加治田村にあった正宗寺という寺院をここに移し再興したという。この正宗寺は由之の父之助が天正十二年四月九日長久手の戦で徳川家康の軍勢に破れて父信輝と共に討死したので、その追福のため建立したもので、寺名は之助の法諡正宗院殿前紀州大守顕功永節大禪定門に因んでつけられた。其後徳川幕府が開かれ、慶長十四年に由成が下津井城主に移封するに及んで正宗寺に安置していた之助の位牌と、信輝の画像を一時龍徳寺に移し改めて当寺に納めた。元禄十一年の冬、失火に遭って堂宇を灰燼に帰せしめたが、翌年に由成の子の由孝が再建した。其后百余年を経て天保十二年十一月朔日の晩八ツ時（午前三時）住職の留守中に庫裏から出火して烏有に帰した。現在の建物は其後の再建であるが、明治以后領主の保護も絶えて次第に衰退し、同世二年頃には維持困難な上に、堂宇も甚だしく朽壊したので建物の一部を取りこわし縮小し約四段歩の屋敷あるとき全部田畑とし、その収穫によって辛うじて法灯を継ぐ状態であった。いま本堂の天井、床板、欄型欄間は寛永十六年、旧居城であった下津井城取壊の際、一城郭に使用されていた古用材を移したもので、二度の大災にはその難を免れたのである。もと池田氏歴代の霊牌と由緒書など保存していたが、大東亜戦争が酣になったので国清寺の宝庫に預けていた所、昭和廿年六月廿九日の爆撃に焼失してしまった。

寺の背後の山中に由成、由孝の墳墓がある。いづれも高さ二米余、位牌型をした立派なものである。寺の東方にある楊山の丘上にも同じ墓石がある。これは両墓制にならって建てられたものである。埋め墓というは死体や遺骨を埋めて葬った場所である。参り墓というはただ墓標のみで死者の霊魂を永久祭地としたもので、前者は多くは寺院より距てた山中に定め、後者は寺院の境内などに定めて、常に参拝するに便じ

たのである。この両墓制の遺習は古くからあるが、我国では江戸時代の初期に霊祀を重んずる思想を鮮やかにするために、武士や僧侶の間に多く行はれたのである。

△ 児島郡天城
池田家老臣館之図




池田氏羽由成幕府の命により下津井城を取挫ぬ寛永十四年二月天城（あまき）に茶屋并に家中屋敷町家ヲツクリ翌十五年三月入城ス　池田氏ノ老臣トナリ二万五千石ヲ領ス（この図面は慶安の頃の作製と思う。現在は倉敷市藤戸町天城となる）。

備前池田家文書に

下津井より天城村迄三里弐拾九町　天城の壱里塚より備中領境目迄拾四町但し岡山より下津井迄八里参拾壱町弐拾間　此内藤戸入海船渡り廣サ九拾間　深サ五尺六尺　干塩ニ成り但し正保四年ニ橋弐ツ懸ル内壱ツハ長サ弐拾壱間　幅二間半。

とある。現在の如く交通機関の完備していない徒歩時代には、この天城は児島に通ずる咽喉部に当り唯一の要衝地点であった。昔寿永年間源平の合戦に児島方面を占據する平軍に対し源軍はこの天城附近の丘陵に布陣し潮川を挟んで攻防戦が演ぜられた当時は、藤戸海峡ととなへられ潮流のはげしい處であった。源軍には渡舩の準備がなく容易に攻撃することが出来なかったが、佐々木盛綱の奇計によって渡渉に成功し、ついに平軍を潰走せしめた有名な戦蹟地である。（一ノ谷四頁　古戦場　藤戸の合戦参照）

○ 家臣屋敷は屋敷の図面の番号と照合せられたい。

| 1 | 池田氏邸宅 | 2 | 岩藤祐三 | 3 | 明屋敷 | 4 | 同 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 5 | 明屋敷 | 6 | 百石 | 水谷浅右エ門 | 7 明屋敷 | 8 | 百五十石 益田粹右エ門 |
| 9 | 六百石 | 10 | 百石 | 柏屋平蔵 | 11 百石 | 12 | 百石 山脇李右エ門 |

○ 天城池田氏系譜

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 13 | 百五十石 | 八代沢右エ門 | 44 | 百五十石 | 佐藤兵右エ門 | 28 | 二百石 | 佐藤兵右エ門 | 43 | 百五十石 | 八度藤兵エ | 58 | 同 | 蔵孝行屋敷 | 59 | 蔵孝行屋敷 | |
| 14 | 二百石 | 山脇助之進 | 45 | 百五十石 | 堀甚蔵 | 29 | 百五十石 | 堀甚蔵 | 46 | 三百石 | 水野内左エ門 | 30 | 二百五十石 | 国佐左エ門 | 47 | 百五十石 | 垣見次兵エ |
| 15 | 三百石 | 加賀八郎兵エ | 46 | 百五十石 | 布施寿庵 | 31 | 百石 | 布施寿庵 | 47 | 百五十石 | 垣見次兵エ | 31 | 百石 | 布施寿庵 | 48 | 百五十石 | 古屋慎右エ門 |
| 16 | 百三十石 | 秋田加兵エ | 47 | 百五十石 | 小出兵左エ門 | 32 | 百五十石 | 小出兵左エ門 | 48 | 百五十石 | 古屋慎右エ門 | 32 | 百五十石 | 小出兵左エ門 | 49 | 二百石 | 松本甚左エ門 |
| 17 | 百石 | 大島勢平 | 48 | 百五十石 | 武藤孫之進 | 33 | 二百石 | 武藤孫之進 | 49 | 二百石 | 松本甚左エ門 | 33 | 二百石 | 武藤孫之進 | 50 | 二百五十石 | 平山御右エ門 |
| 18 | 百三十石 | 佐久間権六 | 49 | 百五十石 | 武藤孫之進 | 34 | 千石 | 石家老垣見平馬 | 50 | 二百五十石 | 平山御右エ門 | 34 | 千石 | 石家老垣見平馬 | 51 | 百五十石 | 太田善兵エ |
| 19 | 百石 | 蒔田甚七 | 50 | 二百五十石 | 太田善兵エ | 35 | 二百石 | 近松甚五兵エ | 51 | 百五十石 | 太田善兵エ | 35 | 二百石 | 近松甚五兵エ | 52 | 百五十石 | 大脇雲平 |
| 20 | 二百石 | 長尾二郎右エ門 | 51 | 百五十石 | 大脇雲平 | 36 | 明屋敷 | | 52 | 百五十石 | 大脇雲平 | 36 | 明屋敷 | | 53 | 百五十石 | 秋原弥右エ門 |
| 21 | 百石 | 坪田為右エ門 | 52 | 百五十石 | 秋原弥右エ門 | 37 | 二百石 | 恒屋孫九郎 | 53 | 百五十石 | 秋原弥右エ門 | 37 | 二百石 | 恒屋孫九郎 | 54 | 二百石 | 峯十郎左エ門 |
| 22 | 明屋敷 | | 53 | 百五十石 | 峯十郎左エ門 | 38 | 百五十石 | 木村九大夫 | 54 | 二百石 | 峯十郎左エ門 | 38 | 百五十石 | 木村九大夫 | 55 | 百五十石 | 武藤三次郎 |
| 23 | 百五十石 | 平山源内 | 54 | 百五十石 | 武藤三次郎 | 39 | 二百石 | 長尾二郎右エ門 | 55 | 百五十石 | 武藤三次郎 | 39 | 二百石 | 長尾二郎右エ門 | 56 | 明屋敷 | |
| 24 | 百五十石 | 渡辺番右エ門 | 55 | 百五十石 | 秋田五郎四郎 | 40 | 二百石 | 秋田五郎四郎 | 56 | 明屋敷 | | 40 | 二百石 | 秋田五郎四郎 | 57 | 足軽小頭家 | |
| 25 | 百五十石 | 堀喜兵エ | 56 | 百五十石 | 野崎茂平 | 41 | 二百石 | 野崎茂平 | 57 | 足軽小頭家 | | 41 | 二百石 | 野崎茂平 | 58 | 同 | |
| 26 | 珊屋敷 | | 57 | 百三十石 | 本城加平次 | 42 | 百三十石 | 本城加平次 | 58 | 同 | | 42 | 百三十石 | 本城加平次 | 59 | 蔵孝行屋敷 | |
| 27 | 平馬下屋敷 | | 58 | 百五十石 | 平手八郎右エ門 | 43 | 百五十石 | 平手八郎右エ門 | 59 | 蔵孝行屋敷 | | 43 | 百五十石 | 平手八郎右エ門 | | | |
| 28 | 二百石 | 佐藤兵右エ門 | 59 | 百五十石 | 八度藤兵エ | 44 | 百五十石 | 八度藤兵エ | | | | 44 | 百五十石 | 八度藤兵エ | | | |

池田信輝 ― 之助

紀伊守勝九郎 父信輝と共に羽柴秀吉に属し天正十二年四月九日徳川家康の本陣三河国を衝うとして名古屋市の西方にある長久手まで進出した初戦には勝つたが敵の打取つた首級を奪元している所へ家康は部将の押原康政を率いて急襲し池田勢を破り信輝と之助信輝の女婿

森長可らは相継いで討死したしかし家康は秀吉の来援を予知して長追せず両軍対立している間に媒和が成立した之助は安藤直次に載せらる、年廿六才、父は四十九才

法名 正宗院殿前紀州大守顕功永節大禅定門

伊勢 兵庫頭貞良の女 継室 塩川伯耆守信氏の女

室

輝政 姫路城主 松平三左エ門 慶長十八年正月廿五日卒五十一歳 室は中川瀬兵エ清秀の女 継室は徳川家康の女

長吉 備中守 鳥取城主 慶長十九年九月廿四日卒四十五歳 ―― 長幸 備中守 松山城主

長政 河内守 慶長十年七月廿日卒三十三歳 輝政に仕ア

之助 ― 由之 出羽 天正五年尾張国犬山城内に生る母は安藤山城守義龍の女 天正十二年四月九日父之助討死の時八歳、慶長六年十一月三日播磨国佐用城主二万二千石を領し後ち慶長十四年二月廿六日備前国下津井城に移り三万二千石 同十八年明石城に移り後ち元和三年伯耆国米子城に移る、同四年三月十一日池田光政の家臣大小性神戸平兵衛のために赤穂の船場中村川渡にて爭論に殺害せらる時に四十二歳 屍は赤穂に葬る 法名 海禅寺殿前羽州大守雲岳永祥大禅定門 内室は蜂須賀長門守家正(蓬庵)の女 慶長十七年二月五日卒す 法名 則心院 池田美作守光政に仕う 母は塩川伯耆守国元の女

元信

由成 出羽 慶長十年某月生る 幼名竹松 元和四年三月父の嗣を継ぎ米子城主となる。池田光政鳥取城主より備前岡山城主に移るに及び寛永九年再び下津井城に移る寛永十四年二月墓参府の命により下津井城廃止となり天城に移る 寛文八年七月朔日隠居し延宝四年正月八日七十二歳卒す 法名 心祭院殿前羽州大守一峰幻入大居士

由貞 主計 万治三年十月二日卒 廿七歳 法名 釈清正定 母は明厳院

由有 知行 千石 寛文八年二月廿日病死 三十歳 法名 傳心院

由孝 主水 出羽 寛永十八年岡山の下屋敷に生る 元禄九年十一月十四日天城に没す

女四人

くま。(五女) 寛永十八年岡山の下屋敷に生る家老千石垣見蔵人平馬の美良女となり

忠義 ― 玄寅

主政

於六（六女）　万治元年二月廿六日赤穂城主浅野内匠頭長矩の家老大石権内良昭の室
　　元禄四年三月十四日京都にて死去五十一歳　母は明蓮院釈静光禅尼
　　女　某　　寛文三年八月八日卒　天城静光寺に葬る
　　天城の家筋は由孝の子由勝の流にして　初代由成から十二代の政之に至る。現在
　　子孫は神奈川県藤沢に住している。

○

大石内蔵助良雄（よしたか）は其先祖は藤原秀郷の出にして、江州栗田郡大石荘に住して
いたので大石姓を名乗った。應仁の乱に一族陣亡して一時家は断絶したが、一族の小山膳
大夫というものに二子があり、長子を九郎、次子を久朝という。この久朝が大石氏を継い
で大石荘に住した。久朝に三子があった。長子を久重、次子を義頼、三男を朝重という。
長子久重の子に重綱、重綱の子に金右衛門がある。この金右衛門は足利義昭に仕えていた
が、織田信長にたぼされたので金右衛門も殺された。そこで久朝の直系は絶嗣した。久重
の季の弟朝重に重国という男子があり重国の子に朝良がある。朝良には良定、良信の二子
があった。この良信は初め新右衛門といい、後ち久右衛門に改め関白豊臣秀次に仕えた
が、秀次が秀吉の怒りをかって吉野山で自殺したので主君を失った久右衛門は大石荘に帰
居し一子良勝を生んだ。この良勝が初めて浅野氏に仕へたのである。この良勝が良雄の曾
祖父に当るのである。

大石氏系系
藤原秀郷……小山膳大夫
　九郎
　久朝大石氏ヲ継グ
　　久重
　　義頼
　　朝重
　　重国
　　朝良　大石彈正右エ門　妻ハ田原糠塚ノ女
　　良信　平右エ門　良定

良勝　兵左エ門（津軽大石系）
良勝　内蔵助常陸国笠間藩士浅野氏の家臣大良の冬陣に功あり家老千五百石
　　重綱
　　金右エ門
　　重綱
　　重国
　　朝良
　　良信
　　良定
　　良昭
　　良欽（よしすけ）赤穂城主浅野氏家老千五百石延宝五年正月朔日死　妻は水戸藩士鳥居左近忠勝の女
　　良重　頼母　妻は浅野内匠頭長直の女
　　長恒　浅野長直の養子　三千石
　　長武　浅野長賢の養子　三千五百石
　　女　浅野家に養女　松平主馬知清の室
　　信云　八郎兵エ入道道雲
　　良昭　権内　赤穂藩家老千五百石寛永十六年生、延宝元年九月六日死三十五歳　本務院厳英岳玄雄
　　居士、室はくま　寛永十八年生岡山藩国老池田出羽由成の女、幼にして家老垣見蔵人平
　　馬千石の養女となる。万治元年二月廿六日結婚、元禄四年三月十四日卒五十一歳京都聖光寺に
　　葬る　松樹院厳鶴山常亀大姉
　　良速　小山孫六　広島藩士浅野氏家臣　三百五十石
　　良師　小山源五右衛門　赤穂藩士浅野氏家臣　三百石
　　良治　平内　高松藩士松平氏家臣　三百石
　　良雄　内蔵助　万治二年十二月赤穂に生る、十五歳の時父良昭死して再び祖父良昭家老職となる千五
　　百石、祖父の死后十九歳にしてその嗣を継ぎ城代家老となる元禄十六年二月四日江戸にて
　　切腹　四十五歳　忠誠院及空浄劔居士　妻名して池田久右エ門または垣見五郎兵エ
　　妻は豊岡藩士京極甲斐守高住の家老石束源五兵衛毎公の女
　　男山八幡宮の大西坊ノ僧　元禄十一年八月廿二日死　（つぎあり）
　　寿内　早世
　　寿貞
　　良房
　　覚運　大西坊ノ僧、実は小山源五右エ門良師の弟子
　　良金　杉山平　主税　討入の際裏門の総領、変名して垣見左内　元禄十六年二月四日切腹十五歳　刀上樹劔信士
　　良以　吉千代　豊岡の興国寺の僧　祖蓮　宝永六年三月上旬死十九歳（元禄十六年十三歳）　二才
　　良恭　大三郎　正徳三年十三歳にて浅野家の家家浅野安芸守吉長に仕え後ち旗奉行千五百石（元禄十六年）
　　くう　るりともいう。浅野家一族浅野長十郎（監物直道）千石、の室
　　さめ　進藤孫四郎の養女
　　元禄八年八月五日大石良雄三十七歳、松山城主（高梁）水谷勝資の死后、幕命により城池没収のため受城
　　使として西下し、一行千十八名宮内村（高松町）の本陣仲達清左エ門外の脇陣に分宿したことがある。

大石良雄の内室は実名は判然としないが、豊岡藩主京極氏の家老石束源五兵衛毎公（つねよしの娘で、後ちに香林院と稱した。赤穂城明渡しの後ち内室は三児を連れて離別し、豊岡の里方へ帰えった。離別の原因は本懐をとげた後ち、その禍を妻子に及ぼさない考えであったかも知れない。忠義のために恩愛の絆を絶つ、義理と人情の板ばさみ、当時の武士はこうした思想に培われていた。しかしこの離別が却って敵方の注意をゆき復讐の意志あることを悟らしめたのは勿論である。もし良雄が溢行を改めたならば、吉良方は益々良雄の行動に監視をきびしくしたに相違ないが、独身になった良雄は毎日島原や撞木町へと遊里に足はせていた。殊に側室をもって正体もない有様であった。側室というは陽軽という隈男では稀れにみる美貌の持主であった。岩竹は二條通り寺町あたりに住んでいた二文字屋次郎右衛門と呼ぶ下層階級の町人の女であることは確とされている。この女を囲旋の労をとったのが伯父に当る小山源五左衛門と従弟の進藤源四郎のふたりであった。この二人は最初から復讐の連盟に加わり、同志中の有力者であったが、内蔵助の看抜け振りが吉良方を欺く手段とは知らず本心からの溢行と思い込んで愛想をつかし、ついに仇討の念は去った。

かくて良雄は隠忍自重、刻苦の末、四十七人の部下を率いて吉良上野介義央の首級を首尾よくあげて本望をとげたのである。幕府は後ちにこの浪士たちの処分問題について評議したが容易に決定しなかったことは事件のあった元禄十五年十二月十五日から翌年の二月四日まで五十日余を要していることによって窺れるのである。その間幕府は老中以下諸奉行に至るまで六十余人に意見を求めた。結極切腹となったが、当時勘定奉行であった戸川備前守ら十四人は十二月廿三日附でこう述べている。それは先づ吉良家に対して厳罰を要求し更に一党の処分については、亡主の志を継いで一命を捨てて上野介宅（本所松坂町）へ討入したことは真実の忠義である。御條目に則り文武忠孝を励んだ道は永儀は正しい。しかし大勢にて兵具をつけ討入したがその手段でなければ本意はとげられない故、右の仕方はやむを得ざるものである。武家諸法度（御條目）には徒党を結んで誓約することは禁止してある。しかし内匠頭の家来が徒党を志したのは、去年内匠頭の処分が城、領地を没収し家系断絶という重いことにかからず不満に思っているのに違いなく、この度の乱入はかようにしなくては本意は達せられず、従ってやむなく大勢にて実行したのである。徒党とは中し述べられない。よって内匠頭の家来どもは御預けのまゝにして置いて、後年になって落着されてはどうか。というのであった。つまり殿中での刃傷沙汰は喧嘩両成敗であるのに浅野直矩については目にあまる處置を行い相手方の吉良義央には極めて寛容な取扱をしているからである。

（おわり）この項未完）


セルフサービスの店
源
河内百貨店
吉備町　下撫川
番7108
電局9
吉備線
有



御気楽に御相談下さい　責任者森安義夫
吉備不動産相談所
吉備町庭瀬六四七
吉備局電一五五番
有線一一〇三番



飲んで健康
毎日の
毎日
難波牧場
吉備町
延友
吉備局308,乙
有線2612